

Title	<萬來喫茶イサム> : 新「萬來舎」を生きるある試み(記憶としての建築空間 : イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	Banrai Cafe Isamu : Trying to live the Shin Banraisha(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	熊倉, 敬聡(Kumakura, Takaaki)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005.) ,p.72- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211350

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈萬來喫茶イサム〉

—— 新「萬來舎」を生きるある試み ——

熊倉 敬聡

キャンパスの片すみ、冬の夕闇が迫りくる、肌寒い空気のなか、ぼんぼりのように温かく灯る一隅がある。その灯りに引き寄せられるように、思わず扉を開けると、なかでは、多くの学生たちが、教職員と思しき人たちや、ふだん大学では見かけない出で立ちの大人たちと、賑やかに談笑している。ちらほらと、外国人たち、それもいろんな国から来たであろう外国人たちも、立ち交じっている。部屋の中央の太い柱にからみつくように、白い木瓜^{ぼけ}の花が幽かに匂いたつ。思い思いに器を手にとり、数ある茶のなかから一つを淹れる。傍らには、白玉やら、煮しめやら、雑穀入りの飯やらが供されている。突如として、ヴィオラの音が鳴る。留学生らしき青年が、皆の談笑に紛れつつも、凜とした音を響かせる。その「練習」でも「演奏会」でもない自然な響きに聴き入る者は聴き入り、話に興じる者は興じている。

そんな「萬來」の空間が、2年前のちょうど今頃、今や工事現場の無粋に占領しつくされたその場にあったとは、誰が想像できよう。

通称「ノグチ・ルーム」と呼ばれていたその場所。イサム・ノグチが、第二次世界大戦後、空襲により壊滅的被害にあったキャンパスに再び学問の、そして交流の活気を生み出そうと、谷口吉郎設計によるその名も「新萬來舎」と名づけられた建物の一角に庭園とともにデザインした部屋である。ノグチ、そして谷口のコンセプトによれば、学生も教職員も分け隔て

なく、集い語らい、新たな知性を醸成するために作られたこの空間は、しかし、私の知る限り（少なくとも20数年前から）、つねに鍵がかかり、学生だけでは入室が許可されず、ごくたまに教職員の会議やレセプションで使われる——大方の学生はその存在すら知らない——いたって「閉じられた」空間であった。しかも、近々、この建物は取り壊され、新たに建つ巨大な校舎兼研究室棟に庭園ごと「移築」されるという。

私は、ちょうどその年（2002年）、文学部の美学美術史学専攻で「美学特殊C」という授業を担当していた。「21世紀的生（活）の『美学』を求めて」というテーマに引きつけられたのか、一専攻の専門科目であるにもかかわらず、様々な学部、遠くはSFCから、60人もの学生が集まった。

この授業の特色は、何よりも、学生たちが自分たちの手で授業を「作る」ことにある。教室内の机・椅子の配置から、研究内容・形式、授業評価にいたるまで、自分たちでアイデアを出し合い、「デザイン」していく。教員は、彼らself-learnerたちをサポートするfacilitatorにすぎない。そうして、試行錯誤の末、いくつかのチーム（「新たなオルタナティヴ・スペース」「脱資本主義」「21世紀的衣食住の『美学』」「脱芸術／アートレス」「セルフ・エデュケーション」「身体のエロス化」「宗教的なもの」「『小さい』メディア」）が出来上がり、それぞれが年間を通して、理論的探求とそれに基づいたプロジェクトを実践することとなった。その「新たなオルタナティヴ・スペース」のチームが中心となり、「ノグチ・ルーム」を移築前に一度オリジナルのコンセプト通りに「萬來」の空間にしてみようと、〈萬來喫茶イサム〉なる企画を考案した。大学当局との度重なる交渉の末、10・11・12月の第3木・金・土に部屋を完全にオープンにしてもらい、学生、教職員、外部の人々が自由に出入りし、交歓する新たな「カフェ的」空間の創出を目指した。しかも、パフォーミングアーツのフェスティバル「東京国際芸術祭」のコミュニケーション・プログラムの協力を得て、国内外の多彩なアーティストたちをゲストとして招いた（大野一雄、椿昇、舟越桂、今村創平、長谷川孝治、小山田徹、オーストラリアの劇作家ジェーン・ハリスン、タイやフィリピンの俳優たちなど）。さらに、通常のサービス／金銭という商業的交換ではなく、〈萬來喫茶イサム〉によって与えられた経験（喫茶、空間、交流など）に何か「お返し」（皿洗い、料理、演奏など）をするという新たな交換＝交歓システムを導入した。

こうして、10月の試験的運営を経た後、11月には、大野一雄の奇跡的な舞い——それは私の43年間の人生でも比類なき感動であった——や、留学生たちの熱のこもった協力も得て、通常の大学にはありえない特異で歓びに満ちた時空を生成した。(ある学生などは、大野一雄の晩を形容して、「こんなことは大学では起こってはいけない」とまで言った。)

本来、多様な年齢・関心の人々が集い、しかも外部の人も自由に出入りができるはずの「大学」という空間。しかし、実態は、様々な制度的なハビトゥスに雁字搦めに拘束され、学生たちが自由に集い語らう場すら十分与えられていない、没コミュニケーションな空間(もちろん、学生たちにも責任の一端はある)。「万來喫茶イサム」は、そうした大学の制度的網目の透き間を、コミュニケーションな熱気で押し広げ、大学が通常抑圧している文化的潜勢力を再活性化しようとする「セルフ・オルタナティブ」な試みであったように思う。

こうして、ちょうど2年前、「ノグチ・ルーム」は、「万來舎」として生きられた空間となった。新しい校舎に「移築」されたあと、それははたして再び生きられるのだろうか? 死にかけた「標本」のように遇することは、作品への、そしてアーティストへの冒瀆に他ならない。

(以上の文章は、以前発表した文章(「大学における『セルフ・オルタナティブ』な試み」、『図書新聞』、第2613号、2003年1月11日)と重複する点があることをお断りします。なお「万來喫茶イサム」のHPは、<http://banrai.inter-c.org/>でご覧いただけます。)

(くまくら たかあき・所員、慶應義塾大学理工学部助教授／現代芸術論)